

リ・モンスター
Re:Monster
外伝 斧滅大帝の目覚め

金斬兕狐

Kanokiru Kogitsune

目次

見解の相違とは自覚し難いモノである〈赤髪ショートの転換点〉 7

斧滅大帝の目覚め 27

鈍鉄騎士の一日 83

夜の赤花と赤い鬼〈ブラ里襲来・赤い花は夜に咲く〉 115

詩篇覚醒者の裏話 153

始まりの名付け〈ゴブ爺のちよつと危険な仕事〉 241



光の勇者

本名：ルーク・イルダーナ・エドモンド

【光の神の加護】を得た
【職業・勇者】の青年。
神託に導かれ、過酷な旅を続ける。

鈍鉄騎士

本名：スティール・クロウバック

傭兵団《戦に備えよ》との
戦に負けて、その軍門に
降った歴戦の騎士。

赤髪ショート

本名：ルベリア・ウォールライン

赤髪で子犬のような雰囲気の
女の子。駆け出し冒険者だったが、
ある依頼をきっかけに
運命が変わっていく。

ゴブ爺

ゴブリン・コミュニティ
【小鬼の集落】の最長老。
ゴブリンとしては非常に長生きで、
その分物知り。

アス江

傭兵団《戦に備えよ》に所属する、
地と雷を操る巨体の半地雷鬼。

オガ吉

傭兵団《戦に備えよ》所属の
オーガ・亜種。棍棒や斧など、
重量級の武器を得意とする。

ブラ里

血と剣を巧みに操る半血剣鬼。
傭兵団《戦に備えよ》所属。

スペ星

強力な魔術を駆使する半魔導鬼。
傭兵団《戦に備えよ》所属。

Main Characters
主な登場人物

見解の相違とは
がた
自覚し難いモノ
である

あかがみ
〈赤髪シヨートの転換点〉



《時間軸…二十七日とそれより数日前》

簡単な、ありふれた依頼の一つになるはずだった。

しかし、実際には私達ではどうする事もできない障害が立ちはだかっていたが故に、このクエストは失敗してしまったのである。

そして、ここが運命の分かれ道だったのだと、私は後になって知る事になる。



今回のクエストの内容は《星神亭》という中小規模の行商人の団を、防衛都市《トリエント》まで送り届けるという、冒険者の定番と言ってもいいモノだ。

とはいえ、本来私のような駆け出し冒険者では受注できないランクのクエストだった。しかし冒険者組合《弱者の剣》のクランマスターが、何事も経験だ、とそのクエストに同行できるよう特

別に取り計らってくれたのだ。

その為通常なら多くても十名程度の人数で行われるところを、私達駆け出し冒険者が十八名、引率役として中堅冒険者の先輩方が六名と、計二十四名ものメンバーが参加する事になった。

人数が人数なので収入は「弧雀」の涙ほどしかないけど、経験を積む為だと思えば我慢できる。

最初は良かった。

そもそも今回進む街道は、国から総合統括機関に定期的なモンスター討伐依頼が出されている区画であり、最近もモンスターが掃討されたばかりだったからだ。

駆け出し冒険者達が経験値稼ぎとして狩るような、「ビッグコック」と呼ばれる七〇センチほどの鳥型モンスターの群れが二、三回出てきただけで、ほとんど危険と呼べる危険はなかった。

だから私と同じく初めて護衛クエストを行う仲間も、皆そこまで緊張しておらず、暇な時間も多かったのが必然的に話も弾んだ。

女の冒険者は私だけだったけど、皆気さくなヒトばかりで気楽だったし、先輩達の話は今後の為になる情報に溢れていた。

それに護衛対象である《星神亭》に四人の女性が居た事も、私にとって大きかった。

【鍛冶師】であるエメリーからは、試作品だと言う指輪やネックレスを格安で売ってもらえたし、

【料理人】の姉妹であるフェリシアとアルマからは、お菓子を分けてもらった。【錬金術師】であり年上で寡黙なスピネルさんも、話してみると優しく、体力回復薬を一本譲ってもらえた（新しいレシピの試作品なので、市販されているモノよりも少々効果は落ちるらしいが）。体力回復薬を譲ってもらえたのは、非常に大きな意味を持つ。

コレ一つで私の命が救われる事になる、かもしれないのだ。冒険者の必須アイテムの一つである体力回復薬は、駆け出し冒険者にはなかなか手が届かない高価なものだ。だから、これは何よりありがたかった。

そんな思いがけない収穫があったりしたせいで、私が油断していたのは間違いない。

今回も滞りなくクエストを終え、皆で酒場で飲む。そんな風になるだろうと、この時の私は楽観的に思っていたのだ。

しかし、そうはならなかった。

唐突に飛来したいくつもの矢が、先輩方の身体に突き刺さる——それが始まりだった。

慌てて治療を試みたモノの、どうやら矢には即効性の毒が塗られていたらしく、先輩達は泡を吹きながら死んでしまった。

私とてヒトが死ぬところを初めて見た訳ではなかったけれど、それでも慣れている、とまではい

かない。先輩達の死体に思わず自分を重ねてしまい、そのせいで思考が停止しかけた。

しかし忘我している暇など、私達には無かった。

何故なら近くの林から、奇声と共に大量のモンスターが飛び出して来たからだ。



「——ツッアアアア!!」

気合いの咆哮を上げながら、高名な現役冒険者である伯父から餞別として貰った唯一の品——鋼鉄製の愛剣を横一閃。

それと共に、

「ルベリア・ウォールラインは戦技【斬撃】を繰り出した」

伯父から教え込まれて体得した、【職業・戦士】ならば誰でも使えるような、基礎とも言える戦技を上乗せする。

愛剣の刀身に赤く淡い光と、必殺の意思が籠る。

目の前の敵——緑色の肌に尖った耳と醜悪な面が特徴的な、通称「山賊ゴ布林」の頸部を斬り断たんと放ったその一閃は、しかし、斜めに傾けられた敵のショートソードで軌道を変えられた。鉄と鉄が衝突する耳障りで甲高い音が響き、火花が散る。刃毀れが目立つ敵のショートソードの表面を、私の愛剣が削っていく。その衝撃に私の手はビリビリと痺れ、舌打ちが漏れる。

痺れにより愛剣を握る力が少しだけ弱まるが、大丈夫、問題はない。まだ戦える。だが、どうやら目の前のバンディットゴ布林はそうでないらしい。今の一撃の衝撃による痺れのせいだろうか、その手はショートソードを失っている。

戦闘職に関して、私は「10」と低レベルな【職業・戦士】しか持っていない。それなのにこれだけの力の差があったのは、恐らく職業レベル「48」まで鍛えられた【職業・農婦】がもたらしてくれた筋力・耐久補正によるものに違いない。

冒険者になる一ヶ月前まで毎日行っていた農作業によって、私の腕は逞しく、手の皮は硬く頑丈になっていた。だから私は愛剣を落とす事なく、反撃に移れたのだろう。

一瞬だけ【農婦】として働いていた日々を思い返すが、今は過去を振り返っている時ではない。手首を返し、今度は袈裟懸けに愛剣を振り下ろす。今度こそ斬り伏せる、と信じてながら。

しかし今回もギリギリのところで、バンディットゴ布林が掲げたラウンドシールドに阻まれてしまった。ラウンドシールドを小破させる事は出来たが、致命傷を負わず事が出来ない。

敵も必死だ。

だが、バンディットゴブリンの体勢はすっかり崩れている。

ヨタヨタとバンディットゴ布林が後退する隙を逃がす事なく、ハイドアーマーに覆われていない大腿部を狙って、再び斬撃を繰り出した。

「——ッシ!!」

「ルベリア・ウォールラインは戦技【斬撃】を繰り出した」

戦技により切れ味が上昇した刃が容易く肉を切り裂く。硬い骨に当たって勢いをやや殺されつつも、足を斬り飛ばす事に成功した。

その傷口から噴き出す鮮血が、周囲を濡らす。斬られた足を必死で押さえながら激痛で呻くバンディットゴ布林。私は止めを刺すべくショートソードを上段に掲げ、重心移動や全身のバネを活かして渾身の一撃を脳天に叩き込む。

今度は防がれる事も無かった。ザグシャ、と肉が切れて骨が潰れる感触が全身に伝わる。飛び散る脳漿と鮮血が私の革鎧を汚した。

洗濯しなければ、と意識の片隅で思った瞬間、



「ルベリアアツ!! 後ろを殴れッ」

最近仲が良くなっていった同年代の男性——チャールズに声を掛けられて、考える間も無く背後を振り返る。同時に、左手に装備していたラウンドシールドを前方に突き出した。

「ルベリア・ウォールラインは戦技【盾打^{アーツ シールドバックス}】を繰り出した」

背後に回って不意打ちしようとしていたバンディットゴブリンの顔面に、赤く淡い光に包まれたラウンドシールドが衝突した。

チャールズの声に反応して咄嗟^{とっさ}に出した攻撃だったので、それが決まった事に私自身も驚いてしまふ。

戦技によって本来以上の硬度を獲得したラウンドシールド越しに、グシャリと鼻が折れて顔が潰れる生々しい感触が伝わる。

鼻血を噴き出しながら、バンディットゴブリンの身体が大きく仰け反^{のぞ}った。

【盾打】の効果の一つ、【仰け反り^{ノックバック}】だ。

その隙を逃さず、ショートソードで首を斬り落としにいく。戦技は体力と精神力を消費する為、今回は使用しない。また、使っても過剰殺害^{オーバーキル}になるだけで、隙が生まれてしまうだろう。

そして私の斬撃は、体勢を崩していたバンディットゴブリンの首を楽々と斬り裂いた。

動脈から勢いよく鮮血が噴出する。肉を斬る手応えと、骨を断つ時にやや刃が欠けた感触が手に残る。

また研ぎに出さないと、などと無意識に考えていると、新たに視界の隅に私を狙う敵の姿が映る。敵は既に棘付きの棍棒を振りかぶった状態で、体勢的にラウンドシールドでの防御も、ショートソードでの迎撃も間に合いそうにない。

そう判断した私は咄嗟にバックステップを刻んだ。

「ク——ッ！」

ブウン、と風切り音を響かせながら振り抜かれた棍棒が私の前髪を揺らしたが、それだけだ。私はダメージを受ける事なく、距離をとる事に成功した。

しかし、そこそが敵の狙いだったらしい。

「グギャキャキャキャ」

「な、バンディットホブゴブリンが何でココに——ッッ!!」

背後の死角で息を潜めていた強敵——バンディットホブゴブリンが、奇声を上げながら襲ってきたのだ。

ゴブリンの上位種であるホブゴブリンは、人間の一般男性の平均値をやや超える程度の身体能力

を持つ。駆け出し冒険者がまず乗り越えなければならない相手として有名だ。

私も以前伯父が捕まえてきたホブゴブリンと闘った事があるのだが、弱っていたにもかかわらず、一対一では殺すのにてこずった厄介な相手である。ゴブリンのように闇雲に突っ込んでくるのなら対処は簡単だが、ホブゴブリンはゴブリンよりも知恵が回る分強いのだ。

そして今回は、状況も相手も悪い。

普通のゴブリンよりも知能がやや高くて厄介なバンディットゴブリンを従えている事から考えてこの個体はバンディットゴブリンの群れの中の一匹が【存在進化】した個体に違いない。そして伯父によると【存在進化】を経験している個体は、生まれた時から上位種だったモノより優れた身体能力と技能を有している場合が始らしい。

確かにその理屈には納得できる。

生物を多く殺し、レベルを上げて成り上がったモノが、最初から『持って生まれた者』に劣るはずがないからだ。努力は、人間もモンスターも等しく強くするのである。

そんな強敵たるバンディットホブゴブリンの拳が私に向けて繰り出されるが、咄嗟に構えたラウンドシールドで防御する事に成功。

しかし戦技を使う暇が無かったせい、ラウンドシールドは嫌な音を響かせる。巨大な何かが衝突してきたような感覚に襲われた直後、私の身体は後方に飛んでいた。

一瞬、何が起きたのかと混乱する。しかし重力に引かれて地面を勢い良く転がった時に、ようやく理解できた。

簡単な話だ。今の攻撃は、私程度の力では耐える事ができないほど、強力なモノだったというだけだ。

ラウンドシールドは殴られた部分が陥没してしまったし、左腕も折れてはいないまでも、痛みでしばらくの間は満足に動かせそうにない。それに転がった時に頭部を石か何かで強かに打ちつけたのだろう、痛みと流血で、意識が朦朧としてくる。

頭から派手に溢れた血が目に入って、視界を赤く染めた。

このまま倒れて休みたい——そんな思いが湧き上がる。しかし、もしそうすればどうなるか分かっているだけに、その選択肢はあり得ない。

血が出るほど歯を食い縛り、痛みでギシギシと軋む身体に鞭を打ち、地面に突き刺した愛剣を支えに何とか起き上がる。足はガクガクと小刻みに震えて頼りなく、片側が赤く染まった視界が揺れるが、それでも立つ。

目の前のバンディットホブゴブリンは、そんな私に即座に攻撃を仕掛けてはこなかった。人間と似た顔立ち——ただし不細工で、今まで見たホブゴブリンの中で最も醜悪だ——に人間と変わらない知性を帯びた瞳で私を見据え、下卑た笑みを浮かべている。

外見や体色などを差し引けば、下賤な人間の男と変わりない。盛り上がった股間がその唾棄すべき思考を如実に表している。

精神的なモノと、腹部の痛みから来る吐きを抑え、助けを求めて周囲に視線を走らせる。

確かにバンディットホブゴブリンは強い。だが、たとえ駆け出し冒険者でも数の利で押し潰せないほどの相手ではない。三人も居れば、簡単に殺す事ができる。三人と言わず、二人居れば何とか倒せるに違いない。

誰か、誰か。血で視界が滲む左目を擦りながら、必死で周囲を見渡した。

しかし、皆それどころではないらしい。

このクエストの要にして司令塔だった先輩方が一番最初に殺された事で、皆の意思がバラバラになってしまったからだ。駆け出しばかりであるが故に、この危機的状況下でどうすればいいのか誰も分からなかったのである。

こんな時こそ一致団結しなければならぬというのに、集まって反撃しようとしている者も居れば、逃げようとして後ろから斬られている者も居るし、飛来した火の玉で燃やされ——って、メイジも居るのかッ!!

バンディットホブゴブリンに加え、【魔術】という強力な攻撃手段を行使してくるメイジが居る

事を知り、私は視界が暗くなるような錯覚に襲われた。

メイジからすれば、駆け出し冒険者などただの虐殺対象に過ぎない。

そりゃ、弓などで遠距離攻撃が出来れば何とか戦える。もしかすれば殺せる場合もあるだろう。しかし私のような剣しか持たない戦士では、間合いに入る前に魔術で殺される事が殆どだ。

力量に差があれば殺すのは容易い、と伯父は言っていたものの、今の私には無理な話である。

私は冒険者である伯父の手解きがあったからこそバンディットゴ布林相手に何とか戦えたが、この戦況を覆せる力量はない。

私よりも力量がやや上なチャールズも、バンディットゴ布林二匹を同時に相手取っているので、私を助ける余裕はないだろう。むしろ、助けに入るべき状況である。チャールズの全身は傷だらけで、呼吸は乱れていた。そう長くは戦えないだろう。

戦況は最悪だ。

でも、諦めたくない。諦めれば、その後どうなるかは冒険者なら誰もが知っている。

男ならほとんどの場合殺されて終わりだ。

だけど女であった場合、捕縛され、連れ去られ、無理やり犯され、子を孕まされ、そして死ぬまで、ゴ布林の子を生み出すだけの存在にされる。家畜のような、存在になるのだ。

それは、嫌だ。絶対に嫌だ。

しばらく前に両親は逝ってしまったし、恋人も居ない。私に生きる術を叩きこんでくれた伯父には悪いけど、私は死ぬ事にあまり忌避感はなくあった。

だから、殺されるのならいい。まだ、受け入れられる。

だけど、犯されて家畜のように死んでいくのだけはお断りだ。

「……めて、や……」

腰の雑囊から、スピネルさんに貰った体力回復薬を取り出す。運良く入れ物が割れていなかったそれを、一気に嚥下する。

口内に広がる、仄かな甘さ。それと同時に身体の節々の痛みが引いた。左腕を問題なく動かせるようになり、疲労感も無くなった。

凄い効果だ。市販の品よりは劣るという話だったけど、今の私にとっては十分過ぎるほどの回復力である。

これで、まだ戦える。

「諦めて、やるもんかッ!!」

咆えて、駆ける。

私達を嘲笑う敵を、一匹でも多く殺す為に。



だがダメだった。

あの後、なんとか数匹は斬り伏せたものの、チャールズ達を殺して集まってきたバンデイトゴブリン共に取り囲まれ、最終的には気絶させられて捕らえられてしまった。今は四肢を縄で拘束され、猿ぐつわを囓まされて住処に運ばれている最中だ。

ゴブリン族の言語は聞きとり難いが、断片的に理解できた会話の内容から、もうすぐ住処に到着するという事は分かった。

最悪だ。

私を倒したバンデイトホブゴブリンの、膨らんだ股間が脳裏を過る。下卑た笑みを見せるその顔、下品な笑い声を上げるその口が近づいてくる幻影が見える。

嫌だ、あんなので、あんなのに犯されたくない。嫌だ、嫌だ、嫌だッ、嫌だッ、嫌だッ!!
いくらそう思えど、しかしそれはもはや逃れ得ぬ未来だった。

四肢を縛られて逃げられず、猿ぐつわのせいで舌を噛み切る事もできない。壁に頭を打ちつけて死のうにも、それが許されるとは到底思えないし、できたとしても全てが終わった後だろう。

汚された、後だろう。

運ばれている最中、何度も【運命の神】である《シクザール》様に祈りを捧げた。

この世に、神は確かに実在する。可能性は低いけど、それでも祈りを捧げる事で神々が応えてくれる場合も、無くはない。

私はまだ一度も応えてもらった事はないけれど、それでも、そんな僅かな希望に懸けるほど、追い詰められているのだ。

しかし状況は変わらない。私は祈るのを止めて、顔を上げた。

守れなかった、守ってあげられなかった、私と同じ境遇にある人達——エメリーに、フェリシア、アルマ、スピネルさん達と目が合った。

その視線のどれもが、私を責めてはいなかった。それが余計に、私の胸を締めつける。

胸が痛む。涙が出る。弱い自分に吐き気がする。戦う術を持たない皆は私を気遣ってくれたのに、戦う術を持っていた私が自分の事ばかりに気を取られている事が、どうしようもなく恥ずかしくなる。

恥じて恥じて恥じて、皆に目で謝った。心から、謝罪した。

弱くてごめんなさい、と。

その後、死んだ父母の顔が浮かんだ。それに、伯父の顔も。

涙が止まる事なく流れ出る。父母には私ももう少しでそっちに行くから、伯父にはただ、ごめんなさい、と思う。涙は、止まる事が無い。

そして、遠くに洞窟が見えた。

ああ、終わった。という思いが胸の中を駆け巡り――



しかしまだ私の運は尽きていなかったようだ。

涙で滲む視界の中に、何かをしていたゴ布林達――思い返してみれば、戦っていたのかもしれない――と、一人だけ体色が黒いホブゴ布林が現れた。

それを見て、私は目を疑った。それは自分の状況に考えを巡らせる事を一時中断させるほどの、驚愕だった。

黒いホブゴ布林など、噂にも聞いた事が無かったからだ。

確かに、鉱山などの洞窟には、褐色の肌を持つマインゴ布林も存在する。しかしココは緑色の肌をしたバンディットゴ布林達の住処であり、何よりマインゴ布林の肌はあくまでも褐色であ

る。

あんな、全てを塗り潰す闇のような、濃い黒色ではない。

あの黒いホブゴ布林は、数多い神々のどれか一柱から加護を受けて【亜種】に【存在進化】した個体なのだろうか？

そこまで考えたところで、近づいてきていたその黒いホブゴ布林が口を開いた。

「ソノ女性たちハ、俺二預カラセテモラエナイカナ？」

表面はあくまで優しく、しかし圧倒的強者の威圧を伴った声音が響いた。

彼は――そう、彼は、表現し難き魅力^{カリスマ}をその身に宿していたのである。

私の運命は彼と出逢うように、決まっていたのかもしれない。私は、私が持っていない“力”を持つ彼に、ただただ惹きつけられるばかりで――

ココから、私の激動の運命が始まりを告げた。

ふめつたいてい
斧滅大帝の目覚め



《時間軸…九十六日～百十八日目》

外界よりも濃い魔力に満ちたこの場所で、中鬼ホイブリンという種族が一体、己おのの目の前に立ちふさがっている。

かつての己や仲間達とは似て非なる種なのだと、直感で理解できた。悔しい事に己がホブゴブリンだった時に戦っていたら、数秒も経たずに殺されていただろうと分かる程度には、このホブゴブリンは強そうだ。

同じホブゴブリンの段階でコイツに勝てるのなんて、オガ朗オウラウくらいしか思い浮かばない。

「キウヤアアアアアアアアッ!!」

威嚇いかくを無視して敵を観察する。

外見的特徴として、まず赤みの強い肌が挙げられる。次いで筋肉の形がハッキリと分かるかなり太い四肢、かつての己をやや上回る大きさを誇る肉体、黄色く汚れた乱杭らんこう歯、やや煤すすけた灰色の頭髮に、殺意が滲にじむ赤い目玉。

装備している防具は黒鉄くろがねの胴鎧かたよろいと手甲、要所を金属で補強した黒革のズボン、踵に小さな突起が取り付けられた黒鉄のブーツ。いずれも動きを阻害せず、それでいて高い防御力を確保したモノである。

と、そこまで観察したところで赤いホブゴブリンが動いた。

まだ己と相手の間には十数メートルほどの距離があったのだが、敵の攻撃は届く。敵の武器が、投擲とうてきできるモノだったからだ。

「ギイキヤアアッ!!」

鋭い呼吸と同時に投げられ、縦に高速回転して甲高い風切り音を生み出しつつ己に迫るのは、小さな斧トマホークだった。確か手斧トマホークという武器で、この赤いホブゴブリンと出会う前に遭遇したゴブリン達も持っていたモノだ。そいつらは、一匹残らず殺してきたが。

トマホークは金属製ではなく、斧頭ふとうから柄つかまで全て、何かの骨を削り出したような品である。

そんなトマホークを、己は右手に持つ戦斧で叩き落とした。左手の盾で防ぐ方が対処はより簡単だったが、盾だと高性能すぎて大半の攻撃は何も感じられない。まるでスライムボールのように弾いてしまうので、敵の実力を正確に測定し難い。だから、あえて戦斧で叩き落としたのだ。

そしてその感触から、己が推察していた敵の実力を修正する。

トマホークを叩き落とされた事で警戒態勢を強め、どこからともなくユラユラと湾曲した刀身の

大剣を取り出した赤いホブゴブリンの姿を見て、己は更に確信を深めた。

まるで燃え盛る炎のような形の大剣を構える敵は、普通のホブゴブリンとは比べ物にならないほどに強い存在なのだ、と。

そして、だからこそ期待する。

己が友に、オガ朗に追い付く為の糧^{かて}足りえる存在であれ、と。

己の奥底から、戦闘を欲する衝動が浮上した。

「ガアアアアッ!!」

「オガ吉は鬼能^{アヒリタ}【赤銅大鬼の咆撃^{オーガフレインゴウキ}】を繰り出した」

昂^{たか}る感情のままに、大きく吸い込んだ空気を一瞬で吐き出すように雄叫びを上げる。

横幅も高さも六メートル程度しかない、茶褐色の金属で造られた四角く狭い通路にその雄叫びが反響し、しばらく残留し続けた。

己の声ながら五月蠅^{うるさ}いと感じるが、滾^{たぎ}る欲望の前では問題にならない。

牙を剥き出しにし、右手に持つ斧を肩に担ぎ、左手に持つ盾を前方に突き出すように構えて前進する。

一歩進む度に、金属で覆われた床から耳障りな異音が聞こえたが、気にせずただ前に。オガ朗から教えてもらったように、真つ直ぐの最短軌道で敵に向かって突き進む。

赤いホブゴブリンとの距離は、走ればたったの四、五歩程度でしかない。瞬^{まばた}きの間に進んだ二歩目には、己の殺傷圏内に敵が入った。

担ぎ上げた斧の柄を握る力を微かに緩める。確か【脱力】というモノで、こうすると素早く動けるらしいが、理屈は知らない。オガ朗が教えてくれたのだから、きっと重要な事なのだろう。

即座に斧を振り下ろせる体勢を整えてから、己は敵を見る。

今から殺す敵の全身を視^みる。

己の行動に対して敵がどんな反応をするのかを知る為に注視する。

そこには期待もあった。

己よりも速くその波打つ大剣で反撃してくるのか、それとも己の一撃を防ぐつもりなのか、あるいは恐れをなして逃げてしまうのか。

それを知りたいが為に視る。

反撃してくるのならよし。どのような攻撃でも左手の盾で防ぎ、斧の一振りを喰らわせるまで防ぐつもりならば面白い。如何に堅牢^{けんろう}な守りだろうとも、一撃で粉碎してみせよう。

逃げるのならば仕方ない。その背中に斧を喰らわせてくれる。

その三択から導き出されるだろう、と己が思い、期待した結末。しかし現実とは違っていた。

己が殺傷圏内に捉えた敵は、ただのホブゴブリンを超えた能力を持つホブゴブリンは、こちらの発した雄叫びただ一声に疎み、怯えたのだ。

一応大剣で防ごうとしている風ではあるが、四肢の筋肉が緊張し過ぎて、その動きはあまりにも鈍い。これでは反撃も、防御も、逃走すらも出来ないのは当然か。

あの雄叫びなど、己にとつては、戦う前の挨拶のようなモノだったというのに。

赤いホブゴブリンはそれだけで動けなくなっていた。先ほどまで殺意が滲んでいた目からは、ただ己に対する恐怖の色しか読み取れない。

普通よりも格段に強いとはいえ、やはりホブゴブリンはホブゴブリンでしかないのか。

なんて、無様な。同じ【鬼】として、腹立たしさが込み上げた。

そう考えた時、己の中でコイツは敵という認識から外れ、ただの獲物になり下がっていた。

拍子抜け。期待外れ。数秒前に感じた思いは、期待は、跡形もなく霧散してしまった。

そして己の顔に、ハッキリと憤怒の感情が浮かんだのを自覚する。期待させておいてこの程度だった獲物が、ただ不快だった。

「脆弱ナ」

怒りを込めて吐き捨て、動けない相手の頭上に斧を振り下ろす。

もはやコイツの姿など一瞬でも見たくない、という思いを込めて振り下ろした斧は、己が意思の通りに目標を左右に分断した。

防具に覆われていない頭部の肉は一瞬で吹き飛んで、中身を撒き散らす。頭部から飛び出した目玉が二つ、己の顔に向かってきたので、それをそのまま食する。

獲物の胴体を守っていた黒鉄の防具はやはり硬く、それなりの手応えがあった。

だが己が愛用している斧の切れ味は、元々あまり良くない。普段からその重量を使って、叩き斬るように扱う事が多い。

黒鉄の防具も、斧の圧に耐えきれずに砕けた。よく見れば死骸の断面はグチャグチャに潰れている。それでも一応以前と比較すれば、獲物の肉体を綺麗に切断できていた。己の成長を知る事ができ、多少の達成感のようなモノを得る。

しかしその嬉しさも、獲物の断面からはみ出た血と、臓腑に混じった糞の嫌な臭いで霧散した。死んでも尚、己を不快にさせる奴だ。そう思いながら獲物だった肉塊を睨みつける。

【魔斧【魔焼の断頭斧】の固有能力【燃える罪人】が発動しました】

しかし血肉が轟、と燃えた事で、その臭いも食欲をそそる香りに変わる。そう言えば前の食事か

ら既に二時間は経過しているだろうか。どうやら小腹が空いていたらしく、香りにつられて腹が鳴った。

焼いた肉は生よりも美味しい。これもオガ朗から教えられた事の一つだ。

獲物の死体を燃やす炎が消えるまで数秒待ち、こんがり焼けた二つの肉塊を掴んで、こびり付いていた黒鉄製のブーツを剥いでから、片方に噛みついた。流石に一口で全てを喰う事はできないので、数回に分けてその肉を咀嚼する。

いい具合に焼けた肉の味を堪能し、多少歯ごたえのある骨を粉々になるまで噛み砕く。肉を喰い終わった後、ボロボロになりながらも口の中に残った黒鉄の鎧の破片を床に吐き出した。

小さな鉄片が床に落ち、甲高い音を立てる。

「ふム」

肉としては普通のホブゴブリンよりも美味しいだろうか。己が中でこいつの分類を『期待外れ』から『美味しい獲物』に切り替える。

敵としては期待せずとも、見つけ次第積極的に殺して、オガ朗達へのお土産にでもしよう。

とも思ったが、確かココで死んだ生物の死骸は「収納のバックパック」などに入れたとしても、一定時間が経過すると全て消えてしまうのだったか。

どうしてそうなるのかについては興味すらないが、とにかくそうなるらしい。であるならば、肉

をお土産に、というのは無理だ。

仕方ない。今度は綺麗に殺して装備品を剥いで、それを土産にしよう。今回も一応、大剣は回収する事ができたのだし。この考えで正解なのだろう、きっと。

などと考えていたら、背後から声をかけられた。

それが誰なのか、振り返るまでもなく分かる。己が聞き間違えるはずが無い。

己が初めて好いて、守りたいと思った存在——アス江である。

「吉やん、お疲れさん。今回も期待外れで、残念やったな」

「ン、ああ。敵はまた探せばいい。ココは、外よりも強い敵がいると言ウ話だから。イズれハ出会エルはずだ。それにココに居ないのなら、また別ノ迷宮ヲ探せばいい。それよりも、美味しいゾ。」

アス江達も食べてミロ」

「ん、あんがとね。ほら、皆も食べー」

己は己が背後に控えていた四名——己の恋鬼であるアス江と、ホブゴブリン・クレリックのホブ水、足軽コボルドの柴犬、最後に【盗賊】と【罾師】を持つマグルという人間の小男に、残しておいた焼き肉を差し出す。

半分とはいえ、他者からすれば十分大きい。その為、己に次いで大きな体格のアス江がそれを受

け取った。

そしてアス江はかつて腕と足だった部分を掴み、引っ張った。焼き肉はプチプチと小さな音を出すという微かな抵抗を見せたモノの、アス江の手慣れた手つきによって徐々に解体されていく。

尤も、己に近い贅力りよくを誇るアス江ならば、焼けているかどうかなどは関係なく、生きていた状態でも同じ事ができただろうが。

解体した肉を、アス江が皆に配っていく。

「ありがとうございますです、アス江隊長」

「心遣い、忝かたじけない」

「あー、っと。腹は減っていないので、アッシは辞退させていただきますヤス。どうぞ皆さんで喰ってください」

ホブ水と柴犬は頭を下げてアス江から肉を受け取ったが、マグルだけは受け取らなかった。

腹が減っていないとはいえ、折角アス江が厚意で解体したというのに、それを受け取らないのか。そんな不満が内心から滲み出て、ついマグルを凝視してしまった。不機嫌そうな表情になっているのかもしれない。

「ひいッ……あ、あれ？ やっぱり腹が減ってたようでヤス。う、美味そうな匂いがあるそれを、アッシにもくれやせんか、アス江の姐御あねこ」

「我慢は毒や。腹が減ったんなら隠す事は無い、気兼ねなく言うんやで？」

苦笑するアス江はそう言いながら、獲物の肩から肘の間までの部分を、何故か微妙な表情を浮かべているマグルに渡した。ホブ水と柴犬は既に美味しそうに肉を頬張ほおほっている。

それを見て、己ももつと喰いたいな、という思いを抱いた。

次はもう少しジックリ味わうでしょう。

さて、問題はこいつらがどこに居るのかという事か。ココに来るまでは一体も見なかったので、たぶん更に地下に行けば自ずと会えるのだろう。

地下に潜る目的が一つ増えた。

ふむ、オガ朗が言っていた食材探索ツアー、というのも面白いかもしれないな。

「あ、ありがとうございますヤス……あ、本当に美味いっすね、コレ」

マグルは最初躊躇ためらいながら焼き肉を一口頬張ったが、その後は全て腹に収めるまで止まる事は無かった。

そんなに美味そうに喰うのなら、何故喰わないなどと言ったのだろうか。まったく、訳の分からん奴だ。

「んじや食事も済んだし、先行こかー。今度の戦闘はウチ等がやるけん、吉やんは下がっついてな。吉やんが出るとウチ等暇なんよ。ウチ等も経験積みたいし、我慢してなア」

普段通り穏やかで明るい笑みを浮かべ、アス江は己にそう言った。

己としては、日々途轍もない速さで開いていくように感じるオガ朗との力の差を縮める為に、少しでも多くの敵と戦いたい。だが、やはりアス江の意思も意見も無視する事はできない。森を出る前にオガ朗から言われた指示の中にも、全体のレベル上げが含まれていた。全く面倒な事だ、と思いつながら、ココに至るまでの出来事が一瞬だけ脳裏を過る。



「現時点で厳守する事は四つだ。一つ目、何でもいから森の外の情報を集めて来る事。二つ目、自分達の手に負えなくなるような揉め事は起こすな。一応イヤーカフスで助言はできるが、できる限り自分達で考えるように。三つ目、全員のレベルを上げて来る事。最後の四つ目が、絶対に死ぬな。一人でも欠けていた場合は、生き残ったメンバーに罰則を与えるからそのつもりで。あとは臨機応変で事で、また連絡するからその時に。では出発だ。健闘を祈る」

これが、森の住処から出立する日にオガ朗から言われた言葉だった。

そして五つ作られたグループはそれぞれ違う方向に向かって突き進み、己達のグループは、出発した日の夕方になってようやく森を抜けた。

その後、食事をしながら行われた活動方針を決める話し合いの中で、己はまず一つ質問した。

強くなる為にはどこに行けば一番良いか、と。

その問いに答えたのは、三人居た人間のうちの一人だった。

迷宮都市に行き、迷宮に挑むのが一番手っ取り早い、と奴は答えた。

だから、己達はココに来た。

地下に進むほど攻略難度が上昇する地下階層型の迷宮【デュシス迷廊】などを保有する、壁で囲われた迷宮都市《グリフォス》に。

迷宮都市に入ろうとしても、オーガである己が原因で手続きに手間取るか、最悪入れない、と予め聞いていた。そこで、己は鬼人種ロイドの為比較的警戒されない立場のアス江の奴隷という事にして、どうにか入る事ができた。

そして迷宮都市に入った当日は、オガ朗に渡されていた素材を売って資金に換えたり、宿を見つけたりと、初めて経験する事の連続だった。

説明が面倒なので詳細は省くが、イヤーカフスを使ってオガ朗に相談しつつ、他のメンバーにも意見を聞いて事を進めた。そうしてどうにかこうにか迷宮に潜るまでの段取りが完成した頃には、迷宮都市に訪れてから既に三日が経過していた。

そして今、己達は【デュシス迷廊】の地下十八階にて、赤いホブゴブリンを殺した。

一度も地上に戻っていないので、久しく太陽を見ていない。だが、迷宮内部の壁自体が発光して昼は明るく、夜になればボンヤリとうす暗くなるので、時間の経過は大雑把に知る事ができる。

潜り始めて既に二日が過ぎた。壁の明るさから推察するに、現在は三日目の昼前くらいだろうか。所々にある罫のせいで進行が遅れるが、マグルによればこれでもかなり速いペースだという。

【デュシス迷廊】は二十五階までという事なので、今日の夕方には最下層に到着できると思われる。最下層にはかなり強い敵が居るそうだが、それなりに深い階層のはずの十八階で出会った赤いホブゴブリンの事を思えば、余り期待できないかもしれない。

まあ、その時は別の迷宮に潜ればいい。

現在ココに居ないメンバーの五名は、外での情報収集を主にさせている。

情報収集という仕事は己には向かないモノだったので、部下達に一任しているという訳だ。

一応五名にも迷宮に潜るようにとも言っている。定時連絡の時にレベルも上がっていると報告があったので、レベル上げについても問題は無い。

そして己達は、深く深く潜っていく。



予測通り、夕方には【デュシス迷廊】最下層の地下二十五階に到着できた。

今己達の前には巨大で、かつ綺麗な細工が施された門がある。集めた情報によれば、この向こう側が終着点らしい。

閉じられた門の前に、ココに来るまでに出会った獲物達を思い出す。

あの赤いホブゴブリンの他にも、青い槍を持った青いホブゴブリンや、巨大な槌もろを持った黄色いホブゴブリン、何らかの金属でできたような巨大な猪、武装したオーガなども出会った。

そしてその全てを屠ころってきた。中には手応えのある者もいたが、大半は期待外れなモノだった。最後の締めくくりがどうなるのか、今はただ気がなっている。

「確か、最後ノ敵は……」

【デュシス迷廊】に潜る前、(己としては知らない方が面白いと思っていたのだが)アス江が中心になって、出現する敵の情報を集めていた。

己はほとんどその内容を知らないのだが、最下層に出現するモノだけは聞いていた。が、詳細は思い出せない。己の記憶力はあまり良くないのだ。

苦笑しつつ、アス江がそつと教えてくれた。

「えーとな。確かこの最下層で会うボスは、一般的な【固定式】ではなくて毎回出てくるヤツがちゃう【召喚式】、てゆう珍しいやつらしくてな、全部で三通りあるらしいんよ。一番多いんが多

分吉やんが次ランクアップしたら成ると思う。『牛頭鬼』らしくて、二番目は強力な魔術を使ってくる。『魔導女鬼蛇』と言うヤツらしいわ。んで最後の三番目なんやけど、これは滅多に出えへんらしくて、集団ならともかく一対一になつたらまず逃げろ、て言われてる。『心象の仇敵』ってヤツらしいわア」

「ソウか。ならば、ソノ『心象の仇敵』とやらガ出るのを期待シヨウ」

「そう言うても、三番目のは千に一つ、万に一つて話や。期待せんほうがええとちやう？」

どこか諭すように語るアス江。確かにその通りなのかもしれない。

だが己はアス江のように頭は良くない。だから願ってもよいではないか。どうか、強敵と戦う機会を与えてくれと。

「では、行つてく。手出しは無用ダ」

「吉やん、頑張つてな。待つてゐるから」

戦いの準備は既に完了している。ボス戦は己だけで挑むと予め決めてあるので、アス江やホプ水達は門を潜らず、ココで待機する事になっている。

両手で巨大な門を押す。すると大した力も必要なく、簡単に開いた。

「オガ吉の旦那。門は開けたままにときやすんで、ヤバくなつたら出てきてくだせー。ボスは門

から外には出られやせんので」

「分かつた。覚えテおコウ」

マグルの忠告を聞きながら、中に入る。そこは今までの通路と同じく茶褐色の金属で造られていたが、縦も横も優に五倍はあるだろう。幅六メートル程度しかなかった狭い通路と違い、斧を窮屈な体勢で振るう必要もなさそうだ。

それにしても、かつてオガ朗と共に見たベルベなんたちのダンジョンと比較すると、余りにも無機質な部屋である。部屋の中心部となる床に赤い何かで刻まれた直径四メートルほどの円陣があるだけで、装飾の類は一切無い。

壁も天井も床も全て真っ平らで、とにかく頑丈だけを求めたように見える。軽く床の感触を確かめると、僅かな凹凸も感じない。ツルツルとしていながらも踏ん張りは利くようで、奇妙な違和感を覚える。これまで進んできた通路は多少なりにも破損があつたので、なおさらそう感じているのかもしれない。

部屋の状況を観察しつつ進んでいくと、門から一〇メートルほど歩いたところで、床に刻まれた円陣から唐突に白い光の粒子が噴き上がった。

反射的に盾を構えたが、光の粒子はどうやら攻撃の類ではないらしい。それでも一応はその体勢のまま、更に量を増やしながら激しく渦巻き出した光の粒子に注目する。

そして視界の先で、光の粒子が何かを形作り始めた。どうやらホブゴブリンと同程度の大きさのヒト型のようなのであるが、まだその細部は分らない。

しかし今まさに【召喚】されている敵から感じる魔力の奔流から、直感は強敵だと告げている。

「面白イ」

自然、四肢に力が漲る^{みなぎ}。即座に動けるよう踵^{かかと}を僅かに浮かせ、腰を落とした。戦いに向けて頭が高速で回転し始める。

身体で感じる魔力の量は、魔術だけならオガ朗を超えていたスペ星^{せい}と対峙した時と似たモノがある。恐らくは相応の魔術を行使してくるに違いない。

つまり今【召喚】されているのは、己と同じく斧を使った接近戦を好むというミノタウロスではないだろう。

ならば魔術の扱いに長けていたという、確かラミニア、だったか？ 既にうろ覚えだ。まあいい。

己にできるのは近づいて斧で斬り殺すか、盾を使うか、肉体を使うかの近距離攻撃か、あるいは口から炎を吐き出しての中距離攻撃だけである。選択肢はオガ朗のように多くない。だから難しく考える事はない。オガ朗も「直感で戦え」と言っていたのだし。

近づいて斬る。うむ、単純明快だな。

と自己完結したのと同時に、光の粒子が収束した。最後の一瞬だけ一際^{ひととき}激しく輝いた後、白い光の粒子は一つ残らず消え去った。

そして陣の中心に居たのは、白い「何か」だった。

鼻や耳のような何かは付いている。しかし口や目や体毛などは一切無く、武具の類は何も装備していない。ただ白い物体がヒトを形作っているだけにしか思えない「何か」である。

己が生きてきた中で、一度も見た事の無い敵だった。というよりも、想像した事も無い敵だ。

普段の癖で気配を探ってみるが、呼吸すらしていないようで全く読めない。存在があまりにも希薄過ぎて、目を逸らしてしまえばどこに居るのかも知覚できなかった。

本当に生物なのかどうか、己には判断しかねる存在だ。

これがラミニア、という奴なのか。何とも気持ちが悪い奴である。

が、外形などどうだってよい。小難しい事を考えるのは得意ではないのだ。とりあえず魔力が集束し始めているので、敵は魔術を行使しようとしているに違いない。

見かけからして力はあまりないだろう。とにかく魔術を構築する余裕を与えるのは良くないと判断し、己は駆け出した。

それと同時にラミニアの集中力を削ぐべく、赤いホブゴブリンを相手にした時のような手抜きではない、本気の咆哮を上げる。

「ダガアアアアアッ！」

「オガ吉は鬼能【オウガフレインゴリア赤銅大鬼の咆撃】を繰り出した」

白い奴の動きが僅かに止まる。しかしそれで充分だった。

その間に距離を縮め、上段に構えた斧を振り下ろす。それに合わせ、斧の刃から青い炎が噴き出した。

「魔斧【魔焼の断頭斧】の固有能力【アレイシウム青い罪】が発動しました」

青い炎によって攻撃範囲が拡張された斧。それを無防備な相手に叩き込む。

確実に殺した、と己は思った。

しかし、現実は違った。

目標の身体が一瞬霞かすんで消える。斧が敵を切り裂く事は無かった。

あの状態で、斧を避けられたのである。

そして斧を振り下ろした後にできた僅かな隙を縫うように走った白銀の閃光が、己の喉を切り裂

いた。

血が流れ出る。少し遅れて痛みが走った。

「——ッガ!!」

反射的に首を後ろに傾けた事が幸いして、斬られたのは皮一枚だけだった。数歩ヨタヨタと後ろに下がる。

喉の傷は数秒もすれば塞ふさがり、ダメージとしては有って無いようなものであった。

それよりも問題なのは、目の前の相手の姿だった。

「……なぜ、オガ朗がココに居る？」

黒い皮膚と、全身に走る赤い刺青いれずみ。銀色の左腕を持つ、己よりも小さなオーガが、先ほどまで白い奴が居た場所に居る。手には白銀のハルバードがあり、その斧頭ふきうちの先には己の血が付着していた。これが今、己の首の皮を切り裂いた凶器なのだ。

一瞬目を疑ったが、見間違えるはずが無い。

生まれた時から共に歩み、自分もこうありたいと密かに願っていた、オガ朗がそこに居る。身体のアチコチに僅かに残る傷痕も含め、己が知るオガ朗と寸分違ちがわぬ姿である。

ただ一点違うのは、その無機質な眼だろう。あの他者を魅了してやまない力強さが溢れた瞳から、まるで大切な何かが零こぼれ落ちたような、そんな眼である。

「ほら、来いよオガ吉」

目の前のオガ朗が、オガ朗そのままの声でそう言った。そして無機質な眼で己を見てくる。それに、どうしようもない腹立たしさを覚える。

これは違う。コイツはオガ朗じゃないッ。

そんな思いが爆発した。

何か、大切なモノを穢けがされているように思えたからだ。

「ガアアアアッ!!」

無意識のうちに、憤怒の咆哮を上げていた。

盾を前面に出して、斧を敵の死角に隠すように構える。既にオガ朗は——否、敵は己が殺傷範囲に入っている。大きく動く必要はない。素早く敵を殺す態勢を整える。

一振りでコイツを叩き殺す、その為の準備を。

「だから頭に血が上ると側面の守りが甘くなる、といつも言っているだろうに」
脇腹に衝撃が走った。不意打ちの衝撃に耐えきれず、己が肉体が傾く。

辛い腹に力を込めていたので肉をごっそりと抉えぐり取られる事こそなかったが、それでも皮膚が弾けて肉をガリガリと削られた感覚がある。結構な血が流れ、苦痛で顔が歪ゆがんだ。

「ウツが——ガアアアアアアアアアアアアアッ」

「オガ吉は鬼能【オガフレインアンライオーロ赤銅大鬼の灼咆】を繰り出した」

痛みに耐えきれず声が漏れたが、ハルバードの追撃を視界の隅に捉え、咄とつ嗟さに口から炎を吐き出して迎撃する。

あえなく避けられてしまったが、敵は炎を回避する為に後方へ下がり、距離を置く事には成功した。それに合わせ、己も後方に下がる。

普段ならば距離をつめて畳みかけていただろうが、今は脇腹を削った攻撃がどういったモノなのか知るのを優先したい。そして敵がなぜオガ朗の姿をしているのか、それも気にかかる。

「一体、ドンナ攻撃を……」

脇腹の怪我は数十秒もすれば血が止まり、痛みも多少引くだろう。しかしそれなりのダメージはあるし、傷口を見ただけではどんな攻撃をされたのかは分からない。

攻撃された時には敵の四肢を視界に捉えていた。だから武器で攻撃された訳ではない。

魔術かとも思ったが、魔力は感じなかったのもそれと違うだろう。魔術ならば必ず魔力による予兆があるはずだ。

ならば、何だ？ 考えるが、まるで分からない。

「相変わらず、オガ吉は豪快だな」

敵が語る。オガ朗の声で。まるで己を昔から知っているように。思考が中断される。

どうしても気に喰わない。ただそこに居るだけで腹立たしくすらある。一刻も早く、コイツを殺さねばならない。何故だか、そう思う。そう思えてならない。

一瞬でも早くコイツを消さねばならない。殺したい。そんな思考が頭に溢れそうになる。

「貴様は、誰ダ？」

「俺はオガろ……」

「その名ヲ貴様が語るナツ!!」

オガ朗、と言いかけた敵に我慢ならず、思わず叫んでいた。その名を簡単に語られる事は、それを許容する事は、到底不可能だった。

斧の柄を握る力が強過ぎて、ギシギシと音が鳴る。無機質な眼をした敵を、視線で射殺するように睨みつける。

しばしの睨み合いが続くが、やがて入口付近から響いてきたアス江の声によって中断された。

「吉や〜ん！ そいつが『心象の仇敵』やツ。そいつは、吉やんが一番強いと思ってる奴に化ける。しかも吉やんが想像する通りの攻撃手段を持っているそうやあ!!」

なるほど、確かに己が一番強いと思っているのはオガ朗だ。オガ朗なら、色んな攻撃方法を持っていた当然である。脇腹に受けた攻撃は熱くもなく、また冷たくもなかった。恐らくは風を操って攻撃してきたのだろう。以前にも、そうやって弱点を指摘されていた事を思い出した。

そこまで思考し、咄嗟に盾を構える。一瞬で距離を詰めてきた敵が、ハルバードで突きを繰り出したからだ。穂先が僅かに帯電している。やはりこのハルバードも、オガ朗が持っているモノと同じ事ができるようだ。

防御は何か間に合ったものの、かなり重い衝撃が全身を走った。それに加え、雷槍が迸る。電気は金属で造られた盾すら通過してきそうだったので、急いで盾の能力を発動させる。

「魔盾【黒鬼の組板】の固有能力【衝撃反射】が発動しました」

この盾には三つの能力があった。

普段から発動させている【重量軽減】と【突破困難】、それに今回の【衝撃反射】だ。これで守りはより一層堅くなった。

繰り返すが、【衝撃反射】は確かに発動した。己が耐えた衝撃は間違い無く敵に返った。しかし次の瞬間、己の身を電気が貫いていた。